

今日の説教のポイント <使徒言行録 20 章 7～12 節>

①なぜこんな話をルカは載せたのか？ 聖書の面白さ！

「パウロの話が長々と続いたので、ひどく眠気を催し、眠りこけて三階から落ちてしまった」(9)。書き様も少々ユーモラスなこの記事をなぜルカは記し残したのか、と考えずにはおれない箇所です。もちろんそれは落ちて死んでしまった青年がパウロによって生き返る結末が待っていたからです。話はたいして面白くないパウロ(コリント 二 10:10) を迎えて、共に礼拝をして喜びの時を過ごしていたトロアスの信者たち。そこに悲劇は起こりました。「騒ぐな」(10)とパウロが叫んだことが、その時の状況をよく表しています。しかし思わぬことが起こったのです。死んだ青年がパウロによって生き返ったのです！ エリヤやエリシャの奇跡を思い出します(列王上 17:21、列王下 4:34)。神様がパウロを通して働かれたのです！

ルカは再び少々ユーモラスな描写をもって、その後を報告しています。「また上に行って、パンを割いて食べ、長い間話し続けてから出発した」(11)。話下手だけど、キリストによって示して下さった神様の恵みを一生懸命話すパウロ。その話を聞いて喜ぶ信者たち。最後の「人々は生き返った青年を連れて帰り、大いに慰められた」(12)の「慰められた」は、単に青年が生き返ったからだけでなく、この神様の集い(礼拝)の下に生きていることを覚えられたからであると思います。今日、この礼拝に集うた私たちも同じなのです！

②「たくさんのもし火がついていた」(8)、が意味することは？

何を考えているのでしょうか？ ともし火がたくさん燃えていて、空気が悪くなり、熱気も相まって窓から落ちたのだと？ そんなことを言いたかっただけなのでしょう。むしろ、この表現は、礼拝の集いが神様の光に包まれて明るさの中にあることを示しているのではないのでしょうか？ そのような中であっても、闇の中に落ちたと思われるようなことが起きることはある。しかし、神様を信じるなら騒ぐな、闇は闇で終わらず、再び光の中に戻していただけるのだから！ 「たくさんのもし火」を落ちた原因に結びつけて考えるより、神様の恵みと結びつけて考える方がずっと意味のあることだと思います。